

館蔵品展「昔の道具とくらし」出品目録

〔会期:令和5年2月4日(土)~7月9日(日)〕

当館では長く後世に高岡の歴史文化を伝えるために、日頃、郷土の歴史・民俗・伝統産業などに関わるさまざまな資料を収集しています。

収集したそれらの資料は調査・整理し、適切に保存・管理して、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では、当館が収蔵する衣・食・住をはじめとした古い生活道具類「民具」に焦点をあて、それぞれの民具がもつ歴史や用途に加え、その時代を生きた人々の暮らしについて展示・紹介します。明治・大正・昭和・平成・令和と時代が進むにつれ、私たちの生活様式も大きく変化してきました。そうした変化を、民具を通して当時の生活を再発見していただく機会になればと考えております。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料をご寄贈いただきました皆様、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
1	カンカン ^{ぼう} 帽	大正中～ 昭和初期	1	径20.6× 高9.6	麦藁(むぎわら)帽子。麦藁をプレスして、糊(のり)やニスなどで塗(ぬ)り固めているため、軽くて丈夫(じょうぶ)である	当館 (富田保夫氏)
2	写真「着物姿でカンカン ^{ぼう} 帽 ^{かぶ} を被る男性」(複写)	昭和初年頃	1	—	日本では男性の夏のフォーマルな帽子として広まった。叩くとカンカンと音がするため、カンカン帽といわれる	【昭】
3	わらながぐつ 藁長靴		2	幅10.9×奥行 25.0×高34.0	雪の中で履く藁製(わらせい)の長靴。底が草鞋(わらじ)になっていて、取り外しができる。爪先(つまさき)部分が割れており、履いてから縄(なわ)で縛(しば)るため、隙間(すきま)から雪が入らないようになっている	当館
4	そでなし 袖無し		1	身丈65.0× 身幅43.0	袖がない腰丈(こしたけ)ほどの短い上着。農作業時や、少し寒い時に作業衣や着物の上に着た。「ドーゲン」とも呼ばれる	当館 (本房繁治氏)
5	すげがさ 菅笠		1	径52.0× 高12.5	主に雨具や日よけに使われた。高岡市福岡地域では、古くから菅(すげ)が栽培(さいばい)され、その菅で笠が生産されてきた。平成21年(2009)には「越中(えちゅう)福岡の菅笠製作技術」として、国の無形民俗(むけいみんぞく)文化財に指定された	当館 (神保成伍氏)
6	モジリ		1	丈83.0× 桁61.0	女性用の仕事上着。袖口が細いため、仕事がしやすく、重ね着もできる。「巻袖(まきそで)」とも呼ばれる	当館 (国奥定治氏)
7	もんぺ		1	丈87.0× 腰回74.0	女性の農作業用の野良着(のらぎ)。戦時中からの女性の日常着だった	当館 (国奥定治氏)
8	たけかわぞうり 竹皮草履		2	幅12.0× 奥行22.5	竹の皮を編んだ底の部分に鼻緒(はなお)が付けられた草履。底が半分ほどの長さしかない「足半(あしなか)草履」もある	当館 (富田保夫氏)
9	たらい 盥		1	径60.0× 高22.5	洗濯(せんたく)用の盥。夏はスイカやビールを冷やすのにも使われた	当館
10	せんたくいた 洗濯板		1	幅55.0×奥行 55.0×厚1.6	洗濯盥に湯や水を入れて、洗濯板を立て掛け、衣類を板の凹凸(おうとつ)の溝(みぞ)にこすり合わせて汚れを落とす。女性の大切な嫁入(よめいり)道具の一つでもあった	当館 (谷道俊雄氏)
11	写真「盥と洗濯板で揉み洗い」(複写)	昭和30年代 以前	1	—	盥に水を入れ洗濯物を浸(つ)けて、しゃがんで洗濯板を使い、石鹼(せっけん)をこすりつけながら揉み洗いする	【昭】
12	「着物の丸洗いの図」 (複写)		1	—	着物を丸洗いする場合の手順を示したものの	【い】

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
13	男物用下駄 げた		2	幅10.7×奥行 23.0×高10.0	雨天時や雪道の歩行に履いた。歯は減ったら差し替えることのできる「差歯(さしは)下駄」である	当館 (西田 弘氏)
14	女物用高足駄 たかあしだ	昭和40年 (1965)頃 購入	2	幅10.0×奥行 22.5×高11.5	雨天時や雪道の歩行に履いた。爪先(つまさき)に覆(おお)いを付けた「爪掛(つまかけ)」は、保温のためと爪先が濡(ぬ)れるのを防ぐためのもの。「足駄〔高下駄(たかげた)〕」は、差し替えできる底の歯が高く作られている。未使用品	当館 (山田館夫氏)
15	子供用下駄 げた		2	幅8.2×奥行 16.9×高9.2	2本歯の子供用差歯(さしは)下駄	当館 (本郷与一郎氏)
16	ざる 笊		1	幅52.0×奥行 45.0×高21.0	野菜を洗ったり、研(と)ぎあげだ米の水を切る道具。食材などを干すのにも使う。高岡では「笊筥(そうけ)」とも呼ばれる	当館 (田中為雄氏)
17	金森佐兵衛作《鉄瓶》 さへえ てつびん	江戸末～ 明治期	1	径10.0× 高19.5	湯を沸(わ)かしたり注(そそ)いだりする道具。金屋町(かなやまち)の鑄物(いもの)職人・金森佐兵衛の作。高岡鉄器(鑄物)の歴史は、高岡開町(1609年)間もなく、前田利長(としなが)が、現高岡市戸出西部金屋(にしぶかなや)から7人の鑄物師(いものじ)(鑄造(ちゅうぞう)技術者)を呼び寄せたことに始まると伝わる。金森家もその流れをくむ家系で、特に4代佐兵衛(1847～98)は、「金寿堂」を屋号(やごう)として用いた鉄瓶の名手(めいしゅ)であった	当館
18	鉄鍋 てつなべ		1	径30.4× 高17.2	囲炉裏(いろり)や竈(かまど)に掛けて、汁物や煮物などを煮炊(にた)きした。大鍋では大量の里芋やさつま芋などを煮る	当館
19	鉄製羽釜 てつせいほがま		1	径43.0× 高33.0	ご飯を炊(た)く鉄製の釜。竈(かまど)にかけるための鏝(つば)を羽に例えて「羽釜」という。鉄の鍋釜は、高岡開町(1609年)以来の金屋町(かなやまち)の特産品だった	当館 (篠井晴夫氏)
20	陶製釜 とうせいほがま	昭和14～20 年(1939～ 45)頃	1	径21.8× 高15.0	戦時中の金属代用品(だいやうひん)。戦時中の「金属供出令(きょうしゅつれい)」により、家の中にある金属製品を全て差出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制された	当館 (五嶋孝一氏)
21	写真「竈(かまど)に掛けられた羽釜(はがま)と自在鉤(じざいかぎ)に下げられた鉄瓶(てつびん)」(複写)	昭和34年 (1959年)頃	1	—	竈(かまど)に羽釜(はがま)が掛けられ、その隣(となり)に自在鉤(じざいかぎ)に下げられた鉄瓶(てつびん)がある。竈(かまど)の焚口(たきぐち)の前には火箸(ひばし)がある。写真奥の薪(まき)を燃やしている	【台】
22	アルミ製羽釜 はがま	昭和20年代 以降	1	径32.0× 高19.7	アルミ製の釜。高岡市街は、戦争で米空軍(べいこうぐん)の空襲(くうしゅう)の被害を免(まぬ)かれた。兵役(へいえき)を終えた鑄物(いもの)業者は銅器生産の設備を利用し、軍需物資(ぐんじゅぶつし)ではなくなったアルミニウムで生活用品(鍋・釜)を大量に生産した。戦後の物資不足で、アルミ製の鍋や釜は多く売れたという	当館
23	東芝自働式電気釜 とうしばじどうしきでんきがま	昭和30年 (1955)	1	径33.3× 高25.3	国産第1号の電気釜(炊飯器(すいはんき))。東芝(発明は協力会社の光伸社)製。主婦の家事労働時間を大幅(おおはば)に減らし、生活様式に大きな変化をもたらした。未使用品	当館 (有澤康夫氏)
24	しゃもじ立て		1	径6.3× 高59.7	竹の節を用いて筒を連ねたように作ったもの。台所の脇に掛けておいて、しゃもじ・はんがい・箸(はし)などを挿(さ)しておくのに使われた	当館 (徳田三郎氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
25	ひつ お櫃		1	径31.6× 高23.4	炊(た)きあがったご飯を釜(かま)から移し入れて保存しておくための道具。「飯櫃(めしびつ)」とも呼ばれる。冠婚葬祭(かんこんそうさい)用に漆塗(うるしぬり)のものもある。夏は炊いたご飯が腐りやすいので木製のお櫃は使用せず、竹製のものに入れておいた。冬は、稲藁(いなわら)で作った蓋(ふた)付の入れ物にお櫃を入れて保温した	当館
26	はこぜん 箱膳		1	幅31.0×奥行 31.0×高17.0	一人用のご膳。箱の中に茶碗(ちやわん)・汁椀(しるわん)・箸(はし)・皿などを入れておき、食事の時に蓋をあおむけて置き、上に茶碗などを並べてご飯を食べる。食後は中へ食器をしまっておく	当館
27	写真「箱膳で食事をする 家族」(複写)	昭和32年 (1957)頃	1	—	各々(おのおの)が箱膳で食事をとる風景	【台】
28	かつおぶしけずり 鯉節削り		1	27.2×13.0× 高9.7	鯉節を削る道具。引き出しのついた箱の上に鉋(かんな)の刃が付いている	当館 (筏井晴夫氏)
29	こんにやくつき 蒟蒻突き		1	40.3×10.0× 高5.9	筒の中に蒟蒻を入れて、突き棒で押し出すことにより、金属製の網目(あみめ)から蒟蒻が細長く切断されて出てくる仕組み	当館
30	はんごう 飯盒	昭和15年 (1940)	1	幅20.3× 高14.5	炊飯器(すいはんき)を兼ねた弁当箱。当初は軍隊で使われた。中蓋(なかぶた)(掛子(かけこ))はおかずを入れるもの。また、中蓋1杯の米に外蓋(そとぶた)1杯の水で丁度良い水加減となる	当館
31	じざいてしよく 自在手燭		1	幅19.8×奥行 10.1×高13.2	蠟燭(ろうそく)を立てて持ち運ぶ移動用の燭台(しょくだい)。垂直(すいちよく)に立てて鴨居(かもし)・長押(ながし)などに引っ掛ける「掛燭(かけしよく)」にもなる	当館
32	いえちようちん 家提灯	昭和期	1	径44.6× 高75.0	中に蠟燭を入れて明かりをとる道具。日の丸の紋(もん)が入っていることから、祭りや行事などに使われたものと思われる	当館 (米森米太郎氏)
33	ありあけあんどん 有明行灯		1	幅26.0×奥行 26.0×高35.0	部屋の照明(しょうめい)道具。持ち運びができる。油の入った皿に、綿糸(めんし)や藺草(いぐさ)などで作った灯芯(とうしん)を入れて点火(てんか)した。夜明けまで常夜灯(じょうやとう)として使用されたので、「有明行灯」と呼ばれた	当館 (斉藤尚司氏)
34	がんだう 強盗		1	径27.5× 幅42.5	一方向を照らすための手持ち用の灯火具(とうかぐ)。「強盗提灯(ちようちん)」の略。現在の懐中電灯(かいちゆうでんとう)に相当する。中に蠟燭(ろうそく)を立てて使用するが、傾けても蠟燭はまっすぐ立っただけになる	当館
35	かくとう 角灯		1	幅9.2×奥行 9.2×高20.5	室内用照明(しょうめい)器具。持ち歩くこともできる。家の中の移動や近所へ出かける時にも使用した。電灯が普及(ふきゅう)したあとも、停電時(ていでんじ)や懐中電灯が普及するまで使われた。「カクト」、「シカク」などとも呼ばれる	当館 (泉 治夫氏)
36	カーバイドランプ	大正末～ 昭和初期	1	径14.0× 高28.3	上筒から落ちた水滴が下筒に入ったカーバイド(炭化カルシウム)に反応して発生するアセチレンガスを燃料(ねんりょう)として使用するランプ。火力が強く、燃料の持ち運びがしやすいため、夜店や屋台(やたい)の照明などに広く使われた。製造・富士陶器株式会社	当館 (徳田三郎氏)
37	高岡市電話交換開通記念 絵葉書(複写)	明治40年 (1907)11月 8日	1	—	「交換室」(郵便局(ゆうびんきょく)内)と「高岡郵便局/高岡市商業会議所(しょうぎょうかいぎしょ)」(金沢・高岡の郵便局長と6代木津太郎平高岡商業会議所会頭)が写る	当館 (浜野堅三氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
38	写真「高岡郵便局内の電話交換室で電話の取次ぎを行う女性たち」(複写)	大正10年代 (1921~26)	1	—	高岡市では明治40年11月5日に電話交換が開始された(記念式典は8日に高岡市商業会議所(しょうぎょうかいぎしよ)で開催(かいさい))	高岡市
39	でるびるじしゃくしきかべかけでんわき デルビル磁石式壁掛電話機	大正15年 (1926)7月	1	幅19.0×奥行 20.5×高26.4	明治29年(1896)にそれまで使用されていたガワーベル電話機に代わり登場した、日本初の磁石式電話機。前面には2つのベルと送話器(そうわき)が取り付けられており、受話部(じゅわぶ)と送話部が別々になっているのが特徴(とくちょう)である。東京・沖電気株式会社製造。左横の受話器を取って耳に当て、右横にあるハンドルを回し、磁石式発電機により発電して電話交換手に連絡して通話した。本機は、昭和40年(1965)頃まで使用された。下の電池箱にはルクランシェ電池2個が入っている	当館
40	3ごうじしゃくしきたくじょうでんわき 3号磁石式卓上電話機	昭和21~24 年(1946~ 49)頃	1	幅15.0×奥行 16.5×高21.5	沖電気株式会社(現沖電気工業株)製造。本資料は、なで肩の「後期型」〔昭和14年(1939)登場〕で、「イ-665磁石式卓上電話機」ともいわれる。上部の受話器を取って耳に当て、右横にあるハンドルを回して電話交換手に連絡して通話した	当館 (小川憲治氏)
41	3ごうMじしゃくしきでんわき 3号M磁石式電話機	昭和20年 (1945)以降	1	幅20.0×奥行 19.2×高10.0	沖電気株式会社(現沖電気工業株)製造。昭和8年(1933)に登場した「3号電話機」は自動(ダイヤル)式であったが、当初は局給電(交換局からの給電)のない加入電話回線もあったので、これを改善(かいぜん)するために同18年に登場した。上部の受話器を取って耳に当て、右横にあるハンドルを回して電話交換手に連絡して通話した	当館 (小川憲治氏)
42	600がたA2じどうしきたくじょうでんわ 600形A2自動式卓上電話機	昭和50年 (1975)	1	幅14.9×奥行 22.7×高12.9	岩崎通信機株式会社製造。「600形電話機」は昭和37年(1962)に登場し、それまでの4号電話機に代わり一般に広く普及(ふきゅう)し、「黒電話」といえば本資料というイメージを与えた。「A2」はダイヤルの戻るスピードが「A1」より速いモデルである	当館 (富田保夫氏)
43	れんたん 練炭コンロ	昭和後期	1	径23.4× 高25.6	練炭を中に入れて使用する。風で消えることなく長時間燃えるため、屋外(おくがい)での煮炊(にた)きや暖(だん)をとる際に用いる	当館
44	なまこひばち 海鼠火鉢	明治~ 昭和中期	1	径29.4× 高21.4	海鼠釉(なまこゆう)の濃淡(のうたん)のついた藍色(あいいろ)で12の面をもつ外側全体が施釉(せゆう)された海鼠火鉢。火鉢とは灰を入れて炭火をおこし、手足を温めたり、湯を沸(わか)かしたりする暖房具。海鼠釉の火鉢はその多くが信楽焼(しがらきやき)(滋賀県(しがけん)産)であるとされ、古くは明治期より生産が始まり、高度経済成長期に需要(じゅよう)が減退するまで全国に広く普及(ふきゅう)したといわれる	当館 (菊田明美氏)
45	写真「置炬燵の図」(複写)		1	—	炬燵檣(きたつやぐら)と呼ばれる木枠(きわく)の中心に、行火(あんか)または掘り炬燵を置き、上から炬燵布団(きたつぶとん)をかけて使われた	【イ】
46	きたつやぐら 炬燵檣		1	幅50.5×奥行 50.5×高37.5	中に炭火を入れた行火などを置き、布団の中で足を温めた	当館 (金刺亀太郎氏)

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
47	ねごたつ (行火) <small>あんか</small>		1	幅×奥行×高 各25.0	中に炭火を入れて手足を温める道具。これを覆 <small>(おお)</small> うように櫓 <small>(やぐら)</small> をのせ、その上に布団 <small>(ふとん)</small> をかぶせて暖 <small>(だん)</small> をとった。布団をかけると猫が寝ている形に似ているため、「ねごたつ」と呼ばれる	当館 (江淵安太郎氏)
48	すみと 炭取り	明治期	1	径24.5× 高32.3	炬燵 <small>(こたつ)</small> や火鉢 <small>(ひばち)</small> に使う炭を、炭俵 <small>(すみだわら)</small> から小出しにして持ち運んだり、入れておくためのもの。竹製	当館 (藤井喜代乃氏)
49	ブリキ製湯たんぼ	大正～ 昭和初期	1	幅32.0×奥行 24.0×高9.0	身体を温めるために湯を入れて寝床 <small>(ねどこ)</small> で使う道具。湯が冷めないように、注水口 <small>(ちゅうすいこう)</small> をできるだけ小さく作り、栓 <small>(せん)</small> をして使う	当館 (織田睦夫氏)
50	とうせい 陶製湯たんぼ	昭和戦中	1	幅22.9×奥行 15.2×高9.4	中に湯を入れて、手足や体を温めるための道具。やけどしないように布に巻いて、布団 <small>(ふとん)</small> の中に入れて使った。「国策湯丹保 <small>(こくさくゆたんぽ)</small> 」とあり、戦時中の金属代用品 <small>(だいやうひん)</small> である	当館
51	まめたん 豆炭アンカ	昭和40～50 年(1965～ 75)頃	1	幅19.0×奥行 15.5×高10.0	布団などの中に入れて手足を温める保温器。豆炭 <small>(むえんたん)</small> と木炭 <small>(もくたん)</small> の粉を混ぜて固めた卵型の固形燃料 <small>(かんとりょう)</small> を中に入れて使用する。商品名「品川 <small>(しながわ)</small> アンカ」。未使用品	当館
52	こて 鏝		1	幅4.5× 高37.8	炭火などの中にコテ部を差し込んで熱したものを、着物などの縫 <small>(ぬ)</small> い目に当て、縫った部分を伸ばしたり、折り目をつけたりする道具。「焼きごて」ともいわれる	当館
53	火のし		1	径11.7×長 37.7×高5.4	底の滑 <small>(なめ)</small> らかな金属製の鍋の中に炭火を入れ、その熱を利用して底を布に当ててシフをのばすための道具	当館 (吉野作治氏)
54	すみび 炭火アイロン		1	幅21.0×奥行 10.6×高19.7	アイロンの本体に火の付いた炭を入れ、その熱で布のシフを伸ばした。上部には、煙 <small>(けむり)</small> を逃がし、空気を取り込むための煙突 <small>(えんとつ)</small> が付いている	当館
55	ナショナル スーパー アイロン	昭和2年 (1927)発売	1	幅17.5×奥行 14.6×高11.9	松下電器製作所(現パナソニック株)が発売した電気アイロン。電気アイロンは、明治33年(1900)頃に登場し、各家庭に普及 <small>(ふきゅう)</small> し始めたのは大正6年(1917)頃であるとされる	当館
56	せいた 背板		1	幅47.0× 奥行77.0	荷物を担 <small>(かつ)</small> ぐために背負 <small>(せお)</small> う運搬 <small>(うんぱん)</small> 道具。稲 <small>(いね)</small> や薪 <small>(まき/たきぎ)</small> など、量の多い物を運ぶのに便利	当館 (堺喜十郎氏)
57	にぼう 荷棒 (背板用)		1	長71.5	疲れたときなど、荷物を背負ったまま荷棒を背板の下に置いて支えて休むことができる	
58	写真絵葉書「背板 <small>うまや</small> 肥を運ぶ女性たち」(複 写)	昭和8～19 年(1933～ 44)頃発行	1	—	馬屋肥とは、家畜 <small>(かちく)</small> の糞尿 <small>(ふんにょう)</small> や敷き藁 <small>(しきわら)</small> などを腐らせて作る肥料 <small>(ひりょう)</small> のことで、農作物の成長によく効いたという。庄川(富山県西部)の近辺の農村にて	当館
59	ふみぐるま 踏車		1	幅158.0×奥行 37.0×高93.5	羽の部分に人が乗って踏むことにより、水位の低い堀から高い田へ水を上げることができる道具	当館
60	写真「踏車による田への 水入れ」(複写)	大正～ 昭和初期	1	—	高岡古城公園池の端 <small>(いけのはた)</small>	高岡市

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
◎特集展示「嫁のれん」						
61	たからぶねもんゆうぜんぞめよめのれん 宝船文友禪染嫁のれん	昭和9～10年(1934～35)頃	1	175.7×158.7	初公開資料。中央に宝船文が染め出された友禪染の嫁のれん。昭和9～10年頃に寄贈者母が嫁入りの際に誂(あつら)えたもの。のれんの幅は5巾(はば)(約1.8m)で、上部には家紋(かもん)の「組角横木瓜(くみかくよこもっこう)」が2つ染め抜かれる。宝船の周りを7羽の鶴(つる)が群れ飛び、所々に金箔(きんぱく)も散らされているめでたい図柄である	当館 (早苗豊治氏)
62	じゅうばこ・じゅうぶとん・じゅうかけ 重箱・重蒲団・重掛け	大正～昭和初期	3	—	婚礼(こんれい)の後、近所や親戚への挨拶(あいさつ)回りに行くときに使われる。赤飯や餅(もち)、饅頭(まんじゅう)などを重箱(別の家のものなので家紋は異なる)に入れ、その上から豪華な刺繍(ししゅう)や家紋の入った重掛けを掛ける	当館 (重箱：江渕安太郎氏 重蒲団・重掛け：早苗豊治氏)
63	ぎつしゃ・からこもんゆうぜんぞめよめのれん 牛車・唐子文友禪染嫁のれん	昭和50年(1975)頃	1	171.5×185.0	初公開資料。中央に桜の花と牛車(俗称・御所車(ごしよぐるま))、右下に3人の唐子が染め出された友禪染の嫁のれん。昭和50年頃に寄贈者娘が結納(ゆいのう)の際に誂(あつら)えたもの。のれんの幅は5巾(はば)(約1.8m)で、上部には家紋(かもん)の「木瓜紋(もっこうもん)」が2つ染め抜かれる。全体的に明るく華やかなめでたい図柄となっている。といでや染物店(高岡市末広町)制作	当館 (松木 勇氏)
64	つのかく角隠し		1	幅16.5×長112.0	婚礼(こんれい)の際に、花嫁が結った高島田(たかしまた)の鬘(まげ)を飾る布	当館 (神保成伍氏)
65	よめい どうちゅう 写真「嫁入り道中」(複写)	昭和31年(1956)	1	—	場所・埼玉県(さいたまけん)所沢市(ところざわし)	【い】
66	まんまくにさくらもんゆうぜんぞめよめのれん 幔幕に桜文友禪染嫁のれん		1	185.0×128.5	中央に幔幕と桜文が染め出された友禪染の嫁のれん。のれんの幅は4巾(はば)(約1.3m)で、上部には家紋(かもん)の「桔梗紋(ききょうもん)」が2つ染め抜かれている	当館
67	おもてうちまきえたかげた(女物) 表打蒔絵高下駄(女物)	昭和前期	2	幅22.5×奥行9.2×高11.2	桐(きり)の台にカン・ホオ・ブナ材の歯を差し込んだ差歯(さしは)の高い下駄で、主として雨天の歩行時に爪革(つまかわ)をつけて履く。竹皮や籐表(とうおもて)つきの高下駄は、足袋(たび)を履いて余所行(よそいき)に用いた	当館 (手崎純子氏)
68	みずあ たげづつ 水合わせの竹筒		1	径6.2×高23.4	婚礼(こんれい)の「水合わせの儀(ぎ)」に使われた。竹筒の中に実家(育った家)の水を入れ、嫁(とつぎ)先の玄関まで持って行き、その水を土製の盃(さかずき)(カワラケ)に入れ、それを娘が飲み干し、玄関先で盃を割る	当館 (金戸 嵩氏)

※所蔵先の写真の出典は、【台】『台所用具の近代史』(有斐閣, 1997年)、【イ】『イラストで見るモノのうつりかわり 日本の生活道具百科』(河出書房新社, 1998年)、【昭】『昭和のくらし博物館』(河出書房新社, 2000年)、【い】『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』(柏書房, 2004年)を示します。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・図・複数資料の寸法は割愛しました。

計 68件76点